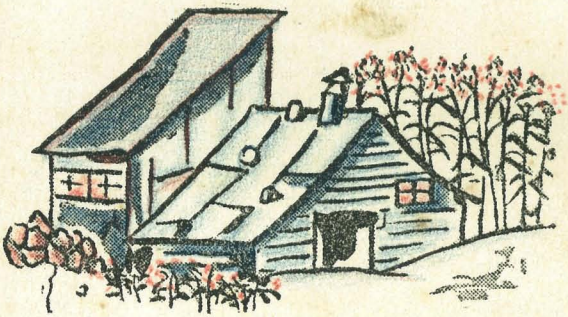
謹呈

★若き學徒の調査と分析★

起ちあがる人々

壕舍生活者・浮浪者の實態調査



東京帝國大學社會科學研究會編

學生書房版

壕舍生活者の動向

田沼　肇

昨年十一月、吾々の研究會が最初の事業としてとりあげた「壕舍生活者實態調査」竝びに「輿論調査」以來すでに嚴寒の三ケ月を經過した。當時と比較すれば、現在の客觀的狀勢は壕舍生活者をも含めて非常な激動を續けてをり、彼等のみを對象として吾々がとりあげるべき問題の範圍は極めて限定されてしまつた。それは吾々自身が調査活動を通じて体認し得た結論でもあるが、同時に急速な客觀的狀勢の進展のしからしむるところである事も否定出來ない事實である。しかしながらこの事は決して壕舍生活者が吾々の視野外に立ち去つた事を意味するものではない。それはあくまでも戰爭の爲、寒氣と饑餓を强要され、たへず生活再生產過程からの脫落の危機にさらされつゝつある人民層として吾々の關心の對象となるべきである。しからば、彼等の爲の越冬對策自身がまさに越冬せんとしつつある今日、彼等が如何にして、又如何に考へて敗戰の冬をしのぎつゝあるかとの問に對し、壕舍部落の再訪問記を三ケ月前との關聯に於て述べたいと思ふ。

昨年の調査に於る私の擔當地域は赤坂・麻布・芝・品川の四區にわたり各區共十戸前後の出來得る限りその名にふさわしい壕舍を對象とした。最初の意圖は赤坂・麻布兩區によつて代表される山手住宅地帶と、芝・品川兩區によつて代表される海岸工業地帶との差異を狙つたのであるが、その期待は殆ど裏切られた。壕舍生活をする程の者は一定の條件と必要に迫られた者であつて戰災前の

單なる地帶別によつて區別せらるべきものではなかつたのである。むしろ地域的にみられる顯著な差異は、戰災者援護事業の進涉度が區によつて非常に異る事實である。例へば古川橋附近に於て、僅かにドブ川一つへだてて向ひ合つてゐる麻布・芝兩區の差におどろかされた事がある。これは三ケ月後の今日に於ても非常に顯著であり、前者に就ては、吾々の對象としたるが如き「ドン底」の壕舍群に關する限りは今日に於ても當然發見する事は出來なかつた。しかも、現在みられる假建築の小賣商・小工場・乃至住宅は、吾々のいふ壕舍の發展ではなくして、その過半は昨年十一月當時すでに相當の建築を所有してゐたか、若くはそれ以後疎開先から歸京して建築したものなのである。

昨年の調査の結果、彼等に與へられた「植物的」なる、極めて適切な形容詞は今日に於ても、やはり强調されねばならない。「植物的」といふ言葉を積極的な意に解すると、根を張り、枝を繁らす植物を頭に畫くが、この意味では彼等も進步したといふ事が出來るかもしれない。自力で寒さを克服せねばならぬといふ至上命題を前にして、兎に角、設備—特に防寒設備—は各自の資力に應じて改善されてゐる。また、地面さへ自由になれば、この春には家庭菜園も擴張したいとは異口同音の希望である。しかしながら、これ等は結局、小さな植木鉢の中に於る努力や希望に過ぎないのではないだらうか。その事自体は決して無意味な事ではない、しかし彼等の全生活は縮少再生產の一途をたどつてゐるのである。

昨秋「家計は何時までもつか」との問に對して、最高位を占めたのが本年一、二月までの一〇・二%であつた。そして、それが事實となつて現れて來た事は今回の個人的な再調査により明かとなつた。彼等は何れも家計失調の最終的段階に在る事を告げると同時に、今回の金融非常措置にはかな

い希望をつないでゐる事を語つた。戰災保險金、竝びに終戰時の退職手當は昨年中に費ひ果したといふのが普通で、多くの者が過去の零細な貯金と、日傭ひ、若くはブローカー的職業からの僅かな收入によつてまかなつてゐるのが現狀である。從つて主食を始めとする配給物資の價格の僅かな騰貴にさへ困惑を感じてゐるのであつて昨年調査當時一ケ月四回乃至五回と答へられた買出回數が如何に冬枯時であるとはいへ今年に入つてから一回といふのが最高で、むしろ行きたくとも行けない者が多いといふ事は彼等の家計失調を雄辨に物語つてゐる。まして靑空市場は壕舍生活者にとつても全く目を樂ませる存在以外の何物でもなく、僅か、イワシを三回程買つたといふのが數例あるのみである。しかも昨年親族からの扶助全くなしと答へた者が五五%にも及んだ如く、よき意味での家族主義にめぐまれないで壕舍生活を餘儀なくされてゐる者の現狀は誠に憂ふべきものがある。

かくの如き生活の極端な窮乏にも拘はらず否むしろそれに起因する彼等の政治的意識の低水準はまさに驚嘆に價ひする。今年總選擧が行はれるのかどうか、現在我が國にはどんな政黨があるのか、といふやうな極く初步的な質問にも答へられるものは未だに少く、天皇制に關しても昨年過半數に及んだ習慣的支持者「御氣の毒」派が增加こそしてゐるが、減少した樣子はなく、稀に絕對護持派が出現すると町會役員であつたりする笑へぬ事實も多い。しかし、昨年と比べると、吾々の說明に對して若干の疑問を發する人が增加し、政治的無關心からの脫却を僅かながら示してゐる。「關心」は「意識」に高められなければならぬ。そしてそれはラヂオも聞けぬ、新聞も讀まない彼等に對して吾々の啓蒙的努力以外に解決の途はないのである。

壕舍生活者對策が單に上からの「恩惠」であつたり、又宗教的「感傷」でもあつたりするにとど

まつてならぬ事は今更言ふまでもない。むしろ吾々にとつて重要な事は、今日「恩惠」としての、若くは「感傷」による施策すら行はれてゐないといふ現實である。しからば壕舍生活者は一体、何を求め、何を欲してゐるのであらうか。

第一に彼等は定職を得る事を痛切に欲してゐる。昨年の調査により、世帯主の約六割は失業者であり、しかも有職者の過半數が所謂「半失業者」であつた事はこの欲求を裏附けてゐる。さなきだに不安な日々を送つてゐる壕舍生活者にとつて特に定職のない事は堪へ難き苦痛なのであらう。「食」と「職」を與へる政府なら何黨が政權をとらうが文句はないといふのが彼等のいつはらざる聲である。

第二に、彼等は定職を求めると同時に、自已並びにその家族の健康に就て限りなき不安を抱いてゐる。疊數は昨年の一人當り一・一疊から殆ど、若くは全く增加してゐない。しかも、外地よりの復員疎開家族の歸京等により世帯員は增加し、この狀態は惡化の傾向にある。その上、饑餓と寒氣は容赦なく壕舍を襲ひ、一度病氣になれば戰災地には醫者も藥もなく極めて不安な狀態に置かれてゐる。昨年「この冬を越す用意ありや」との質問に對し、越せるか越せぬかの問題ではない、越さねばならぬのだとの問題に對する修正が多かつた如く、彼等は悲壯な決意と極度の緊張とを以て越冬しつゝある。從つて眞實の危機は、來るべき一層の食糧不足とインフレを伴ふ梅雨期であり、今度こそは適切な保健衛生對策が絶對に必要である。

第三に、以上述べ來つたところの根本的解決策は、やはり壕舍生活者にとつての最大のハンデイキャツプである「住」の解決以外にはない。この際、彼等にとつては、豐富良質な補修材料の供給

による現在の壕舎改良が最も望ましい事であり、且つ心理的にも實質的にも効果があると信ずる。さしあたつて「隱匿物資摘發」により明るみに出された物資の中繊維製品と共に補修材料は先づ第一に壕舎生活者に與へらるべきであらう。

さて、越冬對策を越冬せしめるが如き政府が、人民の現實の不幸に對して無感覺と思はれる程に無爲無策である事は、こゝに述べるまでもないが、それと同時に人民が自分達の生活を共同の力と行動によつて解決しようとはせず、徒らに個人的努力の限界にとぢこもる「臣民」的性格も反省されねばならない。それなくしては、決して壕舎生活を續ける人々の上に再び幸福の春の巡り來る事はないであらう。

（一九四六年二月）

壕舎生活者への一斷想

上原信博

現在日本の政府當局者は現實の嚴しさに戰き、殆ど傍觀者的に成行に委せてゐるように思はれる。一方、在野の政黨諸士は如何に彼等の主義に於て言論に於て强烈果敢であつても敢へて實行に迄展開しようとしない。更に民衆は如何と云ふに、マ司令部では終戰後民衆の所謂デモクラシー運

編輯後記

敗戰直後、吾々學生の虛脫狀態を評して「日本の學生は戰時中猫を被つてゐた」とするならば、彼等はまさに「猫」そのものに沒落してしまつたではないかと言ふ意味の痛烈な風刺が一臺灣留學生によつて提出されたことは吾々の記憶に余りにも生々しい所であう。當時所謂「猫」についての論議と自己反省が或ひは教室の一隅で、或ひは芝生の上で、或ひは食堂の卓上で、學生間に活潑に行はれてゐたことを想ひ起す度に、私は當の邱炳南君の提言に深い感謝を捧げずには居られない。然し決して日本の學生のすべてが「猫」であつたわけではない。確に久しい間軍事的・封建的・官僚警察的諸權力による極めて無暴な思想彈壓と、文部當局のそれへの追隨による學園の自治喪失によつて、學生はあらゆる自主性を迫奪され、極度に青春の犧牲を强要されたけれども、敗戰を契機として、逸早く「猫の外皮」をかなぐり捨てゝ、自主的に共同研究や讀書會を持つことにより、青春を回復し本然の姿に戻らんとする進步的な氣運が廣範に學生間に擡頭してゐたのである。この氣運と「猫」への覺醒的な提言がマッチして生誕したものこそ社會科學研究會に他ならないのである。こゝに東大社研が學生の自主的にして眞摯な研究的集會として全國の學園の皮切りをなし得た大きな動機があつたと思ふ。爾來全國の學園には沸然と民主主義的な諸團體が成立し未曾有の變動期に處して、はつきりとした意向の下にその研究と活動が展開されつゝある。

ところでこゝに編せられた壕舍生活者及び浮浪者調査は吾々がその初發に於て企圖した現實への共同的な調査であり科學的分析である。少くとも卒直に言つて荒漠たる敗戰の東京に學ぶ吾々に壕舍生活者と浮浪者の顯在化は痛々しい冷嚴な現實の縮圖として映ずる外はなかつた。所詮吾々は眞直

ぐにそれにぶつかつて行つたわけである。

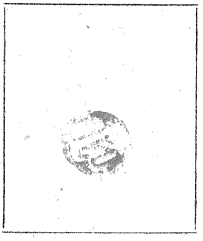
凡そ社會科學徒に最も強く要請されるものは現實に對してはつきりとした問題の所在を把へること、そしてその所在をあらゆる視角から科學的に分析—基本的な解答を與へることでなければならない。例へば調査活動にしてもその調査を方向付ける基本的な問題意識がよくその調査の結果を優れた分析の狙上に乘せるのである。少くとも吾々の調査活動はかゝる基礎の上に立たなければならない。調査活動が無意味な肉体勞働でもなく、單なるハンドワークでもないことはこゝに贅言を要しないが、折々社研は調査機關のやうではないかといふ聲を耳にするので、一般に社會科學の研究こそ現實社會の精確にして嚴密な調査資料なくしては不可能であり、ましてやその科學性を發揮出來ないものであることを強調したいと思ふ。唯最も重要なことは、吾々の問題意識の常時的な陶冶は讀書會や研究會に於て、或ひは討論の形で或ひは共同研究の形でなさるべきであつて、社會科學研究會の性格が調査活動と研究を楯の兩面として持つてゐるといふ點である。吾々は上述の意味でもこゝ十年の間殆どブランクになつてゐた社會科學研究にあらゆる努力を注がなければならない。

そも〳〵壕舍生活者は現下の住宅問題の一斷面として、又浮浪者は過少生產恐慌下に於ける失業問題の一側面として、就中日本經濟機構の特殊性に根差す根本問題としてその對策は焦眉の急を要する問題である。吾々の未熟さは勿論克服されなければならないが、民主主義革命途上にある現實の日本に於て集積せる解決を迫られた問題を常に意識し、その科學的な究明にあく迄共同研究の實を擧げんとしてゐる吾々の發足以來の企圖は、此の度大學新聞社櫻井氏の何時もながら深い御理解と御好意により、一小冊子として一應結實し世に問はれることになつた。これはまことにさゝやか

な貧しい成果の域を出ないが、來るべき社研の發展を劃する一標識として研究發表の機を得たことを何よりも先づ喜びたいと思ふ。

終りに臨み、社研の發足以來何くれとなく御配慮をうけつゝ御寛大な目を以て吾々の研究活動を見守つて居らるる大河内先生が、御病臥中にも拘らずこの小冊子に御序文をお寄せ下さつたことと、社研創設當初から非常な熱意で研究と調査に盡力されて來た畏友邱炳南君が、一月初旬好機を得て臺灣へ歸國されたことを、こゝに報告し、編輯者として感謝の意を捧げたいと思ふ。（高橋　洸）

起ちあがる人々



定價 8 圓

1946年11月3日印刷

1946年11月8日發行

著者 東京帝國大學社會科學研究會
代表 田沼肇

發行者 櫻井恒次
東京都本郷區本郷六丁目二〇

印刷者 阿部松三
新潟市山木戸一丁目二五九

發行所 學生書房
東京都本郷區本郷六ノ二〇
電話小石川(85) 1.773番

印刷・文友社(Y)

J.S.